6 事例紹介

事例 1 幼いきょうだいをケアする小学生への支援（ひとり親家庭）

家庭状況

- 母子家庭、生活保護世帯、母親（30代）、Aさん（12歳、小学6年生）、妹（9歳、小学3年生）、弟（7歳、小学1年生）の４人世帯。
- 母親は、離婚後から精神的に不安定になり精神科に通院している。最近仕事を再開している。夕方から出勤するため、その間の家事や、妹や弟の世話はAさんが行っている。
- 母方祖母は近隣に住んでいるが就労しているため日常的なサポートは困難。

気づくきっかけとその後の対応

気づき　＊小学校の担任 ▶ 市子育て世代包括支援センター「みらい」

- Aさんは体調不良による早退や欠席が続いていたため、担任が話を聞いたところ、「母が仕事で家を空けるので、妹と弟のお世話をしている」「前からお世話をしていたけど、負担ではなかった。今は料理が大変」等、気持ちの開示があった。
- 母親は、以前は保護者面談等で話すことができていたが、最近は学校の出欠席管理アプリでの欠席連絡のみで、学校からの連絡に応答なく担任が心配していた。

対　応

担任が、Aさんの話を何度か聞く中で、「今後の負担軽減のためにみらいと話をしよう」と伝え、みらいが学校訪問を実施。担任が同席しての面談や家庭訪問にみらいも同行する中で、母親とも話せるようになった。その後、社会福祉協議会の訪問員も一緒に、訪問しながら子どもたちの見守りを行っている。

本人・家族の思い・意向

【母　親】

- 思春期のAさんの気持ちが分からない。あまり手伝いもしてくれない。Aさんとの口論も増えており、育児への自信がなくなる。
- 訪問は緊張するので、室内には入らないでほしい。
- 祖母には相談できるが、頼ることに対して「また迷惑をかける」と自責の感情がある。

【Aさん】

- 母親のことは大好きなので、母親が困ることはしたくない。
- 食事の準備を考えなければいけないので、長期休みの間は、家事をしてくれるヘルパーが来てくれたら助かる。
- 学校は楽しい。自分の居場所になっている。

支援方針・課題解決の方向性

＊調整役：子育て世代包括支援センター「みらい」

相談体制

- 要保護児童対策地域協議会の枠組みの中で関係機関と連携を取り、Aさんと母親の同意のもとで情報共有を行っている。

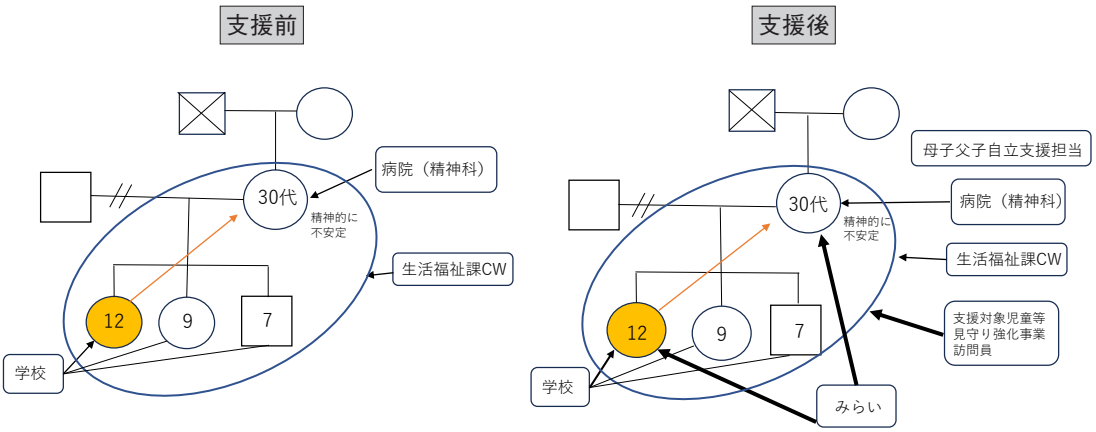
支援方針・課題解決の方向性

支援における役割分担

- 学校　A さんの担任などが A さんの話を聞き、必要時みらいへ共有
- みらい　学校で A さんの話を聞く、母親との面接
- 市生活福祉課　ケースワーカーは年 2 回の定期訪問のほかに、母親の通院や就労状況の確認。子ども支援員は学習支援、進路相談、塾や受験費用等の相談で関わることができる。
- 母子父子自立支援担当　ひとり親ホームヘルプ事業は対象外。母親の仕事のスキルアップのための相談を行う。

ケア負担の軽減に向けた支援

- みらいでは、社会福祉協議会と連携し、家庭訪問で子どもの見守りを実施。今後、母親やAさんと信頼関係を築いた上で子育て世帯訪問支援事業による家事支援を導入し、Aさんの実質的な負担軽減へつなげたいと考える。



支援結果・今後の支援体制

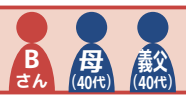
結　果

- 社会福祉協議会の訪問員による週1回の訪問は、Aさんが学校以外の支援先、地域とつながるきっかけになり、健康な大人と接する機会が増えた。
- 面談を重ねる中で、Aさんの、自分の気持ちや家庭の状況などについての表出が少しずつ増えている。

今後の体制

- 学校はAさんにとって一番安心できる居場所であるため、継続して登校できる環境を整える。Aさんの様子を見守り、必要時に話を聞く。Aさんは、学校では明るく振る舞い、優しい性格だが、一方で友達への言葉かけが強い一面もみられている。また、自分の気持ちを紙に書きだすなどの方法で気持ちの整理や切り替えを行っている。
- みらいはAさんや母親との面談を継続し、体調や気持ちを確認しながら、家庭全体の支援を考える。妹と弟の成長発達についても確認を行う。学校や市生活福祉課、社会福祉協議会などの関係機関と連携しながら状況の把握を行う。
- 今後つなげたい支援としては、地域の子ども食堂や、学習支援などへの参加を促し、健康な大人と接する機会や地域での居場所を増やしたい。

事例 2　精神疾患のある親をケアする高校生への支援



家庭状況

- 生活保護世帯。母親（40代、精神疾患・身体障害あり、未就労）とBさん（16歳、高校1年生）と二人暮らし。1年前に母親が再婚し、義父（40代、精神疾患あり、未就労）と三人暮らしとなった。
- 母親は、体調が良い時は家事ができるが、不調の時はBさんが家事を行う。また、母親の精神状態を安定させるための話し相手となっている。
- 父母ともに金銭管理を苦手としており、生活費やBさんの学費の支払いが滞ることがしばしばある。また、Bさんが将来の自立のために貯めている貯金に手を付けてしまうことがある。
- 母親と義父ともに精神的に不安定になり、Bさんに対し暴言を吐くことがある。
- Bさんは定時制高校に進学し、昼間はアルバイトをしている。看護の仕事に興味を持っているが、家庭の経済状況からこれ以上の進学をあきらめている。また、母親への精神的ケアを負担に感じていなかったが、今は母親と義父どちらも不安定になった時にはどうしたらいいか悩んでいる。

気づくきっかけとその後の対応

気づき　＊学校の担任・都のユースソーシャルワーカー（以下YSW）▶ 市生活福祉課

- 担任はBさんの進路希望について事情を丁寧に聞き、看護師になりたい気持ちがあることを確認した。しかし、Bさんは、高校卒業後は就職するしかないと思っていた。
- YSWは、Bさんと定期的に面談をしていた。その中でBさんの貯金を両親が使ってしまうことや、父母への対応についてBさんが強い負担感を感じていることを聞いた。
- 学校とYSW間で相談し、市の生活福祉課に連絡。YSWがBさんに同行する形で、市生活福祉課ケースワーカーと子ども支援員が直接Bさんから、家庭での状況やBさん自身の気持ち、進路希望について詳しく話を聞いた。

本人・家族の思い・意向

【Bさん】

- 看護の仕事に興味があり、勉強したい気持ちはあるものの、現在の家庭の経済状況では進学は難しく、高校を卒業したら就職しなくてはならないと思っている。
- 母親のことを心配し、これまで通り家事をしたり、話し相手になったりしてあげたいと思っている。ただ、義父に対して同じようにケアすることはできないと感じ、不安になっている。

【母　親】

- Bさんが希望するなら進学させてあげたいが、金銭面から難しいと感じている。また、他人に家に入られることには強い不安を感じ、Bさんと義父以外には家事を任せたくないと思っている。

【義　父】

- Bさんについては関心が薄い。進路については経済的に支援できないので、口を出すつもりはない。

支援方針・課題解決の方向性

＊ 調整役：子育て世代包括支援センター「みらい」

要保護児童対策地域協議会を活用し、ケース会議を実施

支援における役割分担

- 父母が精神的に不安定になると、Bさんに対し暴言があり、心理的な影響について経過をみるため、Bさんと保護者への対応は役割を分けて行った。

支援方針・課題解決の方向性

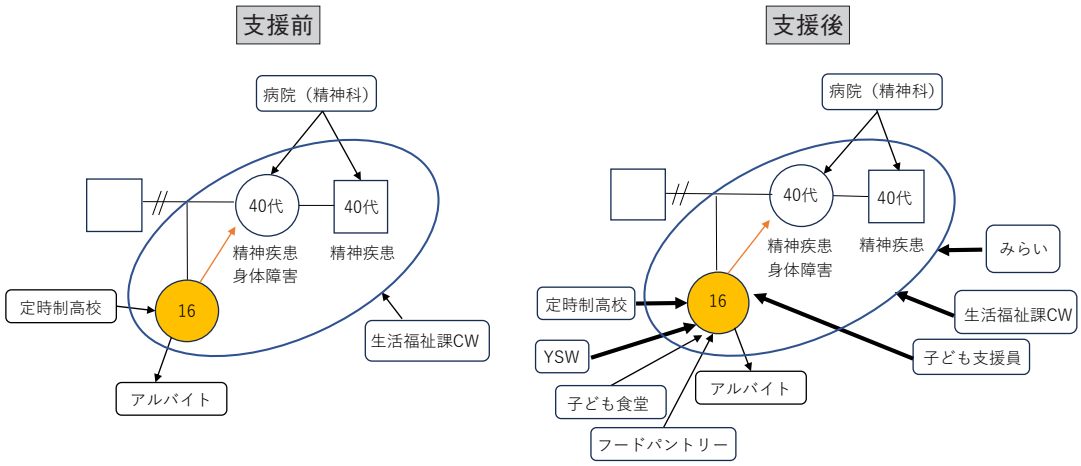
●家庭についての情報収集はみらいが行い、クラス担任とYSWが直接Bさんから話を聞いた。保護者と接点を持つのは市生活福祉課ケースワーカーと子ども支援員が担当し、家庭訪問を定期的に行った。

●各支援者が役割を担いつつ、Bさんが困った時には気軽に頼れるような関係を結びながら、保護者とのつながりも保つようにしていた。

●**金銭面のサポート**　市生活福祉課ケースワーカーはAさんの収支を把握し、子どもの生活支援のための扶助･支援金についてはBさん自身が管理できるようにした。またYSWとともに将来に向けた貯金のための助言を行った。また、家庭訪問の際には父母に対し、Bさんの自立に向けた計画について説明した。父母が金銭管理についての約束事を守れなかった場合には、対処方法についてBさんの意思を確認しながら一緒に考えた。

●**食料面からのサポート**　YSWはBさんに同行し、地域の子ども食堂を案内。またフードパントリーを行っているNPO法人を紹介し、Bさんが直接サービスを利用できるようにした。

●**継続的な見守り**　毎月YSWがBさんに同行し、市生活福祉課ケースワーカーや子ども支援員と面談を行った。家庭内の状況や金銭面について確認し、Bさんの不満や不安について話を聞いた。



支援結果・今後の方向性

●市生活福祉課ケースワーカーと子ども支援員がBさんと面談を重ねていく中で、Bさんが本心や困りごとを自ら話してくれるようになった。またBさん自身への経済的サポート等により、あきらめていた進学について考えられるようになった。

●父母からBさんへの心理的･経済的虐待のおそれがあるため、継続的な見守りの中でBさん本人からもこまめに家庭状況を聞き取る必要がある。ただし高校生という年齢から、Bさん本人の考えや気持ちを尊重し、支援者が父母について悪く言わないことや、無理に引き離そうとしないよう考慮しながら支援を継続することが重要である。

●今後はBさんが自立していく上で、現在の家事負担や精神的な負担へのサポートがさらに必要になると考えられる。また、Bさんが希望する進路などに応じ、将来離家や家族と距離を取ることが必要な場合には、適宜Bさん自身を支援することに加え、父母に対する支援体制の見直しや調整の必要が生じる。Bさんの成長とライフステージに合わせた支援を適宜柔軟に行っていくことが望ましい。

●Bさんが成人期への移行途中にある若者であることを考慮し、今後も継続して支援が受けられるよう、居場所事業やピアサポートを実施している支援団体等へつなぐことも検討したい。

事例 3　身体障害のある家族をケアする中学生への支援

家庭状況

●Cさん（14歳、中学２年生）は、両親と保育園に通う弟（５歳）の４人暮らし。

●半年前に、母親（42）が脳梗塞を発症し、後遺症として左片麻痺となる。補助具を使えば立位保持や歩行もできる。気持ちが落ち込み、塞ぎこんでしまうことも多く、通院以外はほとんど外出をしない。着替えや排せつは、見守りが必要な状態である。父親（40）は会社員（工場勤務）で夜勤もあり、家族の夕食の用意は、毎日Cさんが行っている。

●病気の発症によって、母親は休職している。父の収入のみになり、家計に余裕はない。

気づくきっかけ

気づき　＊中学校 ▶ ヤングケアラーコーディネーター

●Cさんはバドミントン部に所属している。あるとき、「部活を辞めたい」と顧問に急に申し出があった。理由は「試合で使うユニホームを買うことができないから」といい、顧問が改めて話をしたいと伝えたが、Cさんは「別にいいです」と断った。

対　応

●顧問の先生は、担任の先生にCさんからの申し出について共有をした。担任の先生は、Cさんの母親が障害を持っていることを把握していた。経済的な不安は、今後の進路にも影響すると考えて、夏休みの面談のときに話を聞いてみることにした。

本人・家族の思い・意向

【Cさん】

●半年前から生活が一変し、家庭で食事づくりや洗濯、弟の保育園の送り出しとお迎え、母親への感情面のサポートなどを日常的にしているため疲れている。また、登校するのが精一杯で、授業にも集中できない状態であった。自分のことでお金を使うのは避け、少しでもお金の負担を減らした方がいいのではないかと感じている。部活や友だち付き合いもしたいけれど難しいと感じ、葛藤している。気持ちを言葉にして表せないもどかしさも抱えている。

【母　親】

●自分が不自由な体になり負担をかけてしまい、家族に申し訳ない気持ちを感じている。家のことをしてもらうのは、とても助かっているが、学生生活を楽しんでほしい。

支援方針・課題解決の方向性

＊ 調整役：ヤングケアラーコーディネーター

ヤングケアラーコーディネーター（以下、YCC）の関わり

相談を受けたYCCは、Cさんと学校で面談をして、日常生活の状況や感じていることを聴いた。Cさんは家族に対して感じていること少しずつ話をした。Cさんが学校生活も、家族のことも向き合えるように一緒に考えることを約束した。

後日、家庭訪問し、母親のお話を伺った。社会保障の手続きについて説明を行う。例えば、傷病手当金の申請によって収入を得ること、身体障害者手帳を取得し生活支援のサービスを受けること、（１年後に）障害年金の申請を行えることなど経済面の支援について情報提供した。また、母親に障害福祉課サービス支援担当を紹介した。

支援方針・課題解決の方向性

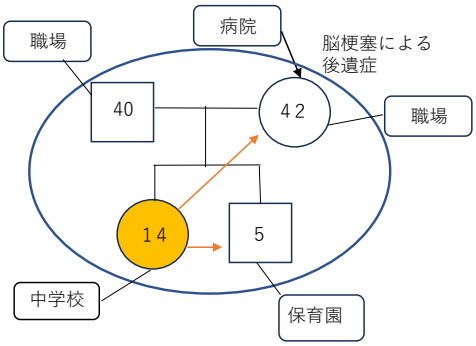
ケア負担の軽減に向けた支援

父親と一緒に役割分担について、話し合いの場をつくり検討を行った。出勤時間を調整してもらい、弟の保育園の朝の送迎については、父親が行うことになった。帰りのお迎えは、ファミリーサポートを利用することになった。

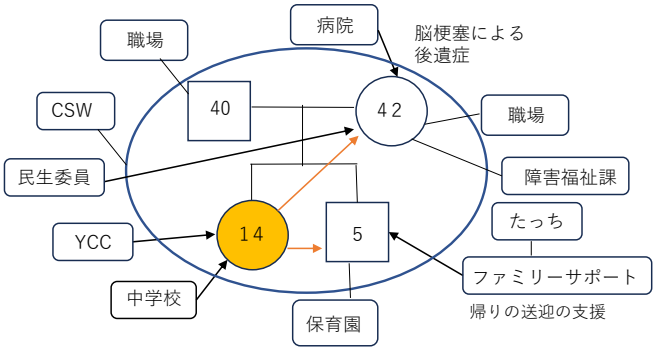
地域で相談できる人につなぐ

YCCは、家族の同意を得て、Cさんの地区のコミュニティソーシャルワーカーに連絡をして、困ったときに相談できる先として、民生委員にこの家庭の見守りを依頼した。

支援前



支援後



支援結果・今後の方向性

- 母親はCさんとゆっくり話せる時間を作った。母親には、「バドミントンのユニホームを買ってほしい」と伝えることができ、「もちろんいいわよ」と快諾してくれた。購入することができ、部活動に継続して参加できるようになった。自分の気持ちをわかってもらえたこと、気持ちを親に伝えられたことは、Cさんにとって大きな自信につながった。
- ファミリーサポートを利用することで、Cさんの弟の送り迎え負担を軽減することができた。家族の役割分担を再確認したことで、父親が勤務日に合わせて家事を行うようになった。
- 母親は福祉のサポートを得ることで、気持ちが外に向くようになっていった。そして、職場とも相談し、合理的な配慮はしてもらえるか、あるいは、障害者雇用の形態で再就職が可能か検討していく。
- 今後は、学校において、Cさんが困ったとき、心配なときに相談できる環境を整えていくこと。中学卒業後を見据えて、YCCとは継続的に話ができるようにしていくことになった。また、同世代のケアをしている人と出会える機会につなぐことを検討していく。

事例 4　認知症の家族をケアする若者への支援

家庭状況

●Dさん（19）は、父親（48）と祖母（75）の３人暮らし。Dさんが３歳の時に、両親が離婚、祖母に育ててもらった。高校１年生の頃から、アルツハイマー型認知症の祖母の介護を父親と一緒に行っている。Dさんは、大学進学を目指して、週に数回、塾に通っている。

●祖母は要介護３、平日5日間は認知症専門デイサービス（以下、デイ）に通っている。ADLはほぼ自立しているが、認知機能の低下があり、同じことを繰り返し話したり、トイレットペーパーをトイレに散乱させたり、不安になると「いなくなりたい」などの発言が見られる。最近、買い物に出かけて帰れなくなり、交番のおまわりさんにお世話になった。

●父親は、フルタイムで仕事をしており、夜遅くに帰宅をすることも多く、Dさんに祖母の世話や見守りを任せている。

気づくきっかけ

気づき　＊デイサービスの職員 ▶ ケアマネジャー

●デイの送迎時に、Dさんの顔色が青白く、ふらつきもみられたので、「体調があまりよくなさそうですね」と声をかけると、「今朝4時に祖母がトイレを汚してしまって、それから祖母の対応をずっとしていたので…」と、小さな声で話しました。「そうでしたか。おばあ様のこと任せてください。ゆっくり休んでくださいね」と伝えた。

対　応

●デイのスタッフは早速、事業所の相談員に情報共有し、Dさんの体調不良の様子、ケア負担の重さを感じ、ケアマネジャーに報告をした。ケアマネジャーは、父親とは毎月モニタリングのための訪問で会うが、Dさんがどのような状況で祖母を介護しているのかあまり知らなかったので、一度Dさんに会ってみることにした。その後、Dさんに連絡をして、会う約束をした。

本人・家族の思い・意向

【D さん】

●小さな頃から祖母が育ててくれたことに感謝の気持ちを持っている。大学には進学したいが、祖母の病状を考えるとそばにいてあげたい。また、祖母のお世話は当たり前のことだから優先している。受験勉強には集中して取り組めていない。高校のときから、友人づきあいなどもなく、気軽に話せる友達はいない。

【父　親】

●祖母（実母）の認知症の症状については、正直困惑していて受け入れられない気持ちがある。イラっとしてしまうから、Dさんがお世話をしてくれているので、つい甘えてしまっている。働きながら介護をするにも体力的につらさもある。Dさんの進学を応援したいものの、家で見てくれる人がいなくなるので、これからどうしたらいいのか不安もある。

支援方針・課題解決の方向性

＊ 調整役：地域包括支援センター

相談体制

●ケアマネジャーはDさん、父親の話を聞いて、家族（ケアラー）への支援の必要性を感じ、地域包括支援センターに相談をした。地域包括支援センターはDさんと父親のケアの負担について把握し、具体的な支援の検討が必要だと考えたため、支援関係者で担当地区ケア会議を開くことを提案し、ケアマネジャー、デイの相談員、ヤングケアラーコーディネーターを招集した。

支援方針・課題解決の方向性

担当地区ケア会議での話し合い

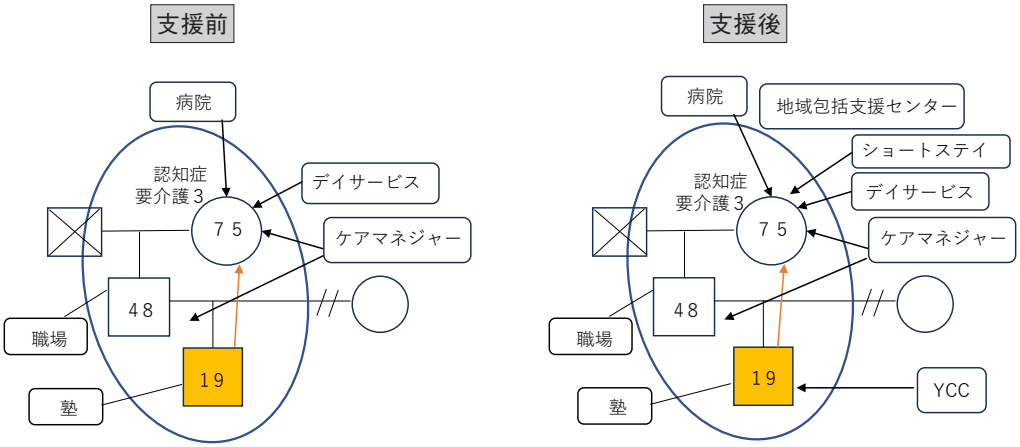
会議では、それぞれの立場からの情報共有や今後の支援方針について検討を行った。デイでは、祖母が家でも快適に過ごせるように、日中活動で覚醒してもらうよう働きかけ、ご家族に排せつケアについてのポイントをお伝えすることにした。送迎時に、ご家族の心身の状態について様子を見て、変化があれば、ケアマネジャーに共有することにした。また、ケアマネジャーは、祖母のサービスの見直しについて検討し、デイを土曜日も増やすこと、あるいは、ショートステイを使って家族が熟睡できる時間をつくることを提案した。また、父親やDさんの気持ちや体調の変化を、毎月のモニタリングのときに確認するようにした。

ヤングケアラーコーディネーターは、Dさんの話したいタイミングで直接話したり、LINEチャットで気持ちを話せる機会をつくることになった。

ケア負担の軽減に向けた支援

ケアマネジャーは、支援関係者で話した内容を父親とDさんに伝える機会を設けた。Dさんは、家のことを理解しているヤングケアラーコーディネーターに出会った。

祖母のお世話は、土曜日にデイの利用が増えたため、Dさんの時間を増やすことができた。また、日曜日は、父親が主に祖母の見守りをすることになった。



支援結果・今後の方向性

- Dさんは、自分の気持ちを話した経験がなかったため、複雑な思いを吐き出せて、すっきりした気持ちになった。祖母のことについては、困ったときはデイやケアマネジャーなどが対応してくれる安心感があり、さらに、自分自身のことで悩んだら、ヤングケアラーコーディネーターに話ができるようになった。進学についても前向きに取り組んでいく気持ちが高まり、模擬試験を受けることを決めた。祖母がショートステイを利用するときは、夜まで勉強が集中してできるようになった。
- 父親は、実母の病気のことを受け入れるのが苦しかったが、認知症の主治医からすすめられた男性介護者の手記を読み、自分と似たような男性介護者の気持ちに共感して、少しずつ受け入れ、会話や一緒に買い物に出かけたりするようになってきている。
- 今後は、祖母の体調の変化を見守り、重度化していくことを想定して、介護者として知っておいたほうがよい情報を適宜提供していく。例えば、食事ができなくなってきたときの対応、グループホームや施設の利用についての検討、医療費や介護費がどれくらいかかるかなど。介護の見通しが立てられるようにすることも、家族の支援につながると考えている。